

動物園の一夜

平林初之輔

青空文庫

樹立^{こだち}の青葉は、病後の人のように喘^{あえ}いでいる。

戦場に遺棄された戦死者のように四肢をだらりと投げ出してライオンが正体なく眠っている。虎^{ひよう}も豹もごろりと横になつて寝ている。孔雀^{くじゃく}は妍^{けん}を競う宮女^{きゆうじよ}のように羽根をひろげて風の重みを受けておどおどしている。象は退屈そうに大きな鼻をぶらぶら振っている。大小無数の水禽^{すいきん}のさざめき、蛇のように、長い頸^{くび}をくねらして小さな餌^{えさ}をさがしてはついばんでいる駝鳥^{だちよう}、檻^{おり}の外には人間どもが、樹陰^{こかげ}のベンチの上に長々と寝そべったり、

のろまな足どりで檻から檻へと足を曳き^ひずったりしている。

植物と動物と人間とが、差別を撤廃して、原始の生活に帰ったような上野の動物園の真夏の昼過ぎである。

二十年振りではいった動物園は、その当時と少しも変わっていないように私には思われる。少なくとも東京の街区のあわただしい変化とくらべるとここは昔のままである。

ところでこの年月の間一度も動物園のことなど思い出したこともない私は何故こんなところへ一人ぼっちではいつてきたのだろう？ どう考えてみてもわからない。無目的で、無意識でいつのまにか、自然にこんなところへ来ていたものにちがいない。

「森林に自由存す」と言った人があるが、動物園はある意味で森

林だ。都会のまん中で、動物と植物とが人間の破壊の手から保護されている動物園は、ある意味では処女林と同じだ。誰の心の中にでも潜在している自由を慕う要求が、どうかしたはずみに、急に意識の表へあらわれてきて、私の足をここまで運ばせてきたのかも知れぬ。

ともかく私はここにいる動物の一つの仲間のような顔をして樹陰のベンチに腰をかけていた。

四十そこそこの麦むぎ藁帽子をかぶった男が、ふところからビスケットを取り出しては、象にほうってやっている。象は、まるで対等の動物同士のように、遠慮も、はにかみも、命令服従の観念もなく、大きな鼻のさきで、小さいビスケットを拾って口の中へ

ほうりこんではあとをせがんでいる。男はにこりとも笑わずに、まるで動物の習性を研究している謹厳な動物学者か何ぞのように、次から次へとふところからビスケットをとり出している。そしてその取り出しかたがだんだんはよくなって、かれこれ一封度^{ポンド}もはいつていそうな紙袋を二十分位で空っぽにしてしまつて、紙袋をそこへすててさっさと歩いて行つた。

私はしばらく眼をつぶつた。頭の中が鳥の巣のようにかさかさになつて、思索力がまったくなくなっている。いったい私は何をしているのだろうか？ どこから来てどこへ行くつもりなんだろう？ そもそも、ここはどこだろう？ それよりも、私の現在の状態はどんな具合なのだろう？ 私は急にひどい空腹を感じた。象

は幸福だなあ、ここにゐる動物はみんな非常に幸福だ！ 第一安全な住所がある。食物くいものがある。私も何だかここにゐると幸福のような気がする。第一ここでは、あの意地の悪い眼を感じなくともよい。下宿のお内儀かみの細くて険のある眼、下宿代の仕払しはらい能力がなくなつたと見てとつた時に、がらりと一変した、何とも言いようのない、侮蔑と憎悪と猜疑との眼、それから近所界限のありとあらゆる人間の不快極まる眼！ 私は思わず、その眼の一つが、あたりにありはしないかと思つて、ひやりとして見まわした。

それはそうと私は世間の人間には全く驚嘆きょうたんのほかはない。みんな一人の例外もなく生活しているのだ。もちろん悲惨な人間もあるにはあるが、私のように完全に行き詰まっている人間は一

人もないらしい。

半年ほど前に三ヶ月の退職手当を貰って、××会社から路頭へ
ほうり出された私は、ちょうどねじをまかれた時計が一定の時間
だけ動いていて、ある刹那に^{せつな}ぱったり動くのをやめてしまうよう
な具合に、ぴたりと行き詰まってしまったのである。親も兄弟も
親しい知人もない上に、知らぬ人に向かつてはろくろく口もきけ
ない私は、完全に生活の手段を失ってしまったのだ。それでも今
日まではとにかく、あらゆる屈辱にたえて生きてきた。だが今日
から先は人間が生理的に、栄養の補給なしに生き得る日数だけ生
きて、燃えつくした蠟燭^{ろうそく}の火のように自然に消滅してゆくより
外はない。私には自殺をする勇気もないからだ。

私は、最後の十銭の白銅を牛飯にかえて五六時間地上の生活をおぼす代わりに、ついふらふらと氣紛れでそれをこの動物園の入場料にかえてしまったものらしい。何しろはいつた時のことはどうもはつきり記憶しておらぬ。

四時頃、私は西日を浴びて猿の檻の前に立っていた。「道ばたに犬長々とあくびしぬ、我れも真似しぬうらやましさに」不思議に啄木の心境が思い出される。じつさい動物は羨ましい。私は、^{びんしょう}敏捷に枝から枝へ、金網から地上へ跳びまわっている猿が羨^せ望^{んぼう}に堪えなかった。実に元氣な動物だ。それにひきかえ疲労と空腹との極に達した私の身体は、少しはげしく動かせば、そのままくたくたとくずおれてしまいそうな気がした。

ふと気がつくと、二三時間前に、象にビスケットをやっていた男が、またビスケットをどこかで買ってきたものと見えて、今度は猿にそれを投げてやっていた。子供らは面白がつてそれを見てきやつきやつ騒いでいたが、この男は、まるで笑いを禁じられた人のように、真面目な義務的な仕事をしている時のような態度で、猿にビスケットをやっている。ビスケットは時々網から弾じき返されて柵の外へころがり出た。驚くべき濫費だ。らんぴ 私はこの男の計り知れざる財力に一種の崇拜すうはいを感じた。不思議なもので、こんな時には、嫉妬しつとの念よりも、崇拜の念が先におこるものだ。

群衆の足はことごとく入口の方へ向かつて、徐々にはあるが、しかし、一斉に動き出した。園内には人影がだんだん疎まばらになっ

てくる。先刻のビスケットの男もいつの間にかあたりに見えなくなっていた。

突然、全くだし抜けに、素晴らしい靈感のように、一つの考えが私の頭の中を横ぎった。私はそつとしやがんで脚もとに転がっていたビスケットを二つ拾い上げた。そして、誰も見ていないことをたしかめてから、急いでそれを口の中へほうり込んだ。菓子は餓えた味覚を麻痺まひさせながら舌の上で解けていった。

私は暗示にかけられた人間のように、急に見ちがえるように元気になった。肉体もすばしこくなつたが、それにも増して頭が敏活にはたらし出した。

私は、あたりにいる動物、たとえば熊のようにすたすた歩き出

した。そして、小鳥のように鋭敏な視力をもつて、熱心にあるものを探しはじめた。出口の方へ向かつて帰つてゆく群衆とは逆の方向へ、何か忘れ物でも取りにゆくような、はつきりした目的意識をもつて私は歩いて行つた。

二

動物園の入口から、右手の方へ進んでゆくと、鸚鵡おうむや小鳥の檻があつて、その先に「閑々亭」という額をかけた、茶室めいた四あ阿ずまやが一軒たっている。この小家こやの由緒来歴は私は何も知らぬ。ことによると、幕府時代には、動物園の敷地は、どこかの大名の

屋敷であつて、その屋敷に付属していた茶室がそのまま保存されているのかも知れぬ。何にしてもそれは古色蒼然こしよくそうぜんとして埃にまみれている。秋から冬にかけては、縁側へ落ち葉が散りしいたのが幾日も掃かずにそのままになっていることがある。

この閑々亭の前をとおつて進んで行くと、だらだら坂になつて、坂の終わりに一つの橋があり、橋を渡るとちよつとした広場があつて、正面に象の小舎こやがあり、左手に茶店ちやみせがあり、右手の岡の上にライオンや虎や豹のいる所がある。この橋は幅三間位もある相当広い橋で、下は石畳いしだたみを敷きつめた水路になっている。水路といつても雨の降らない日は水はほとんど流れていないのである。

午後六時を過ぎると動物園の中は、急にひっそりとして、「都会のまん中の処女林」の面目を發揮してくる。入場者のメ切は四時半で、五時には、かれこれ園内には人影が見えなくなり、それから、一時間ほどの間は、守衛や掃除人夫らしい人がまだ往来しているが、六時半頃になると、人間の声も、人間に關係のある物音も園内ではほとんど聞こえなくなる。

この時刻に、私は、いま言った橋の真下に、やもりのように側壁にぴったり身体からだをつけて息を殺していた。橋の下のちようどもん中の辺にいれば、付近を通行する人に見つかおそる俱れのないことを私は昼間によくたしかめておいたのである。

やがて日はとつぷり暮れてしまった。園内が静かになるのに反

比例して遠くの物音がだんだんはつきり聞こえてくる。電車の音は案外すぐ近くに聞こえる。タクシーの走る音が二分おきぐらいに通り返る。そして、その間に、地球の隅々から集まってきた色々な動物の鳴き声の不気味なジャズのように騒々しく聞こえてくる。

人間というものは肉体が極度に疲れてくると、脳細胞に不思議な変調を来すものと見えて、私はしよっちゅう奇怪な妄想に囚^{とら}われた。ひよつとすると、ここの番人が、ライオンの檻の扉をしめるのを忘れておいたかも知れぬと私は考えてひやりとした。実際餌^{えさ}をやるときには、きつと誰かが扉をあけるにちがいないが、一年三百六十五日の間には何十とある猛獣の檻の扉を一つぐらいし

め忘れることはありそうなことだ。そして運悪くも、ちやうど今夜それを閉め忘れたかも知れたものでない。私は、ライオンが人間の匂いを嗅ぎつけて、のそのそ私のそばへ近づいてくる光景を想像した。私の頭蓋骨や肋骨はライオンの歯の間で、搗き肉のように碎かれる、私は頭をくわえられたまま、胴体や手足をだらりとぶら下げて無抵抗に噛まれている。不思議にこの想像は快いものであった。噛まれても痛くも何ともないような気がした。

またあるときは、誰か見回りの番人が、カンテラを下げて、私の隠れ場所を探しにきそうな気がしてしやうがなかった。しかもちやうど見回りの男が通りかかるときに、私がくしやみか、咳をしたらどうだろう。私は人ごみの中でつかまつたすりのように、

大勢の中へ曳ひきずり出されて、ひどい目にあうにきまっている。その時には何と言つてごまかしたらよいものだろう？ 私は法律の知識はないが、ことによると、規定時間外に、こうした公営物の中に潜伏している者は、重い罪になるのかも知れぬ。そんなことを思うとどうも気のせいか人の通るようなあしおと登音が聞こえてくる。そして不意に咳がこみあげてくるのだ。

駒下駄こまげたを穿はいているので、幸いにも水は足うらまではとどかないのであるが、腰をかけるわけにはゆかない。じつと立っているからだと、身体の中へ棒をとおされたように疲れてくる。渴をいやすために、というよりもむしろ、ひどい空腹を補うために私は時々しやがんで下を流れている水で唇をぬらした。その度に全身の骨が

めりめりと鳴って、どこかの骨がぽきんと折れてしまいそうな気がする。

下宿へ帰って、意地悪そうなお内儀かみさんの眼を見るよりもまじだと思つて、不意に考えついて選んだこの棲み家すかも、とうてい長くは辛抱できないことがすぐにわかつてきた。どんな垢あかじみた布ふ団とんでもよい。いや布団などはなくとも畳でもよい。畳もなければ板の間でもかまわぬ。板の間がなければ、せめて乾いた地面でもよい。しばらくその上に大の字になって、寝ころぶことができたら、明朝あすは殺されてもかまわない、と私は思った。私は不眠のために夜の明よけるまで床の中に輾てん転てんしていたことを思い出す。だが不眠なんてことは、今の苦しさに比べると極楽浄土だ。軟らか

い布団があつて、その上に身体からだをぞん分に横たえることができるのだもの。立っているということ、しかし立ってじつとしているということがいかにつらいものであるかを、この時ほど痛感したことは私はない。

ところで私は世界中の人間の中で果たして一番くずなのだろうか？ なぜ私一人がこんな境遇に陥つたのだろうか？ 少なくとも私は教養においては専門学校を卒業している。徳行においても人並みはずれて悪いことをしたおぼえはない。それどころか、会社につとめている時分には、皆私のことをほめていたものだ。なるほど今日の社会制度は、すべての人に職を与えて、すべての人の生活を保障するようにはできていない。東京の町だけにでも十万も

二十万もの失業者があることは知っている。だが、私自身が、えりにえつてその失業者の群にはいらねばならぬ理由がどこにあるのだろう、しかも十万も二十万もの失業者のうちで、誰一人餓えて死んだという人のことを聞いたことがない。みんなどうにかして生きてはいるのだ。ところが私自身は、これからさき生きてゆけそうな望みは絶対がない。これは私自身のうちに、私には気のつかぬ致命的な欠陥があるのではなからうか？ たとえば、私の容貌ようぼうに、私だけにはわからなくて、他の人には一目でわかるような忌まわしい記しるしがついているのではあるまいか？ そういえばいったい私はどんな顔をしていたつけ？ 私は自分の顔を忘れてしまったような気がした。どうしてもはつきり頭にうかんでこ

ない。今すぐに急いで鏡を見て、私の顔に先天的についているらしい、人を嫌悪させる正体を見届けねば居てもたつてもいられないような気がした。

三

夜^よはだいぶ更けた。有り難いことには月の夜である。それに、動物にも明かりが必要なのか、それとも夜^{やちゆう}中に人間が見回る必要があるのか、動物園の中には方々に電灯がついている。

私は恐る恐る陰気なくれ場所を抜け出し、石垣に足をかけて、水路を爬^はい上がった。誰も見ている者はない。私は橋の下に立つ

ているうちに、このことは予め計画しておいたので、少しも躊躇ちゅうする必要はなかった。で注意深く下駄を脱いで、四つん這ばいになって、橋の袂たもとの道を横ぎった。

この橋の下手の左側に、二羽の丹頂たんちようの棲んでいる鉄柵でこしらえた、円形まるがたの檻があり、檻の周囲は、ローマの円形劇場か、両国の国技館の観覧席のように爪先上りになって、その場所全体が播鉢形すりばちがたをしている。そしてこの観覧席にあたる傾斜面には人間の腰の辺りまでありそうな熊笹が一面に生え茂っている。私は夜が更けて、動物園の中を歩いても絶対安全になる時刻を見ずまして、この熊笹の中へ移転しようと前から計画していたのだ。というのは一晩中橋の下に立ちつくしているわけにはゆかないが、

昼の明かりのあるうちに熊笹の中へはいっているとちよつと身動きしても発見されそうな心配があつたからだ。

私が格好な場所まで這つて行つて、ごろりと笹の中に身を横たえようとしたとき、だしぬけにうしろの方から、低い、けれども心臓を凍らせるような鋭い声が聞こえた。

「おい！」とたつた一言である。

私は膝頭が不意にがたがた慄ふるえた。意外なこともずい分あるがこれほど意外なことがあるうか。こんな所に既に先客があると誰が想像するものがあるう。うしろをふり向くと二間ばかりはなれたところに、一人の男が中腰になって、私の胸のあたりへ短銃ピストルの銃口つつぐちを向けている。顔はよくわからぬが、どこかで見たこと

のある人のようにも思われる。しかし、どこで見たのか、誰なのかははつきり思い出せない。

「鞆を出せ！」男はまた低いしつかりした声で言った。

「鞆？　どんな鞆です？」と私は案外落ちついて反問ききかえした。

吃驚びつくりが度を過すと、人間は不思議にまた落ちついてくるもの

と見える。男は無言のまま私のそばへ寄ってきて、左の手で私の懷をさがした。私は向こうがするままにさせておいた。

「どうした？　どこへかくした？」

「何をです？」

「鞆をさ、白ばれるな」

「僕は鞆なんか知りませんよ、どこに置き忘れたんです？」

「では何の用があつて、こんなところにいるのだ？」

「行くところがないから不意に気がついたのです」

「なぜあの橋の下へはいつたのだ？」

「あそこが身をかくすに都合がよかつたからですよ」

男はだまつて短銃^{ピストル}を懷へしまった。眼が暗がり^{ピストル}に馴れてくる

につれて、私は、この男は昼間象や猿にビスケットをやつていた男であることを思い出した。そして一種の親しみを感じてきた。

だが、この男は、それ以外に、まだどこかで見たことがあるような気がしてならない。よく考えてみれば、昼間見たときから、私はそんな気がしていたらしい。それだから妙に、この人の様子が目についたのであろう。それにしてもこの男こそ何のために、こ

んなところへ来ているのだろうか？　それに鞆というのはいったい何のことだろう？

「起きていては見つかるおそれがありますから、笹の中に寝こらんで話しましょう。守衛に見つかったら、面倒ですからね」男は言葉の調子をがらりとかえて、妙に丁寧になった。そして気のせいかずつと若くなつたように私には思われた。

「一体どうしてあんたはこんなところで夜を明かす決心をしたんです。何か悪いことでもして身をかくす必要でもあるんですか？　それにどうしてあの橋の下へ行つたのです？」

私は問われるままに、ぼつりぼつり身の上話をはじめた。昼間の暑さと雑踏とにひきかえて夜の動物園は静かで、さわやかな風

が冷え冷えと肌に感じられる。二人は時々聞き耳をたてては警戒しながら、低声^{こごえ}で問うたり答えたりした。私が昨日^{きのう}から何も食べないので、ひどく空腹を感じていると話したとき、彼は懷中からビスケットの紙袋をとり出して、「これを食べなさい」と言つて私の顔の前においた。私はだまつてそれを食べた。昼間この同じビスケットを拾つて食べたことは流石^{さすが}にだまつていた。

「ところで、あなたこそ、一体どうしてこんなところへ来ているのです？」と私はとうとう問いに転じた。

「僕はここに泊まるのはこれで三度目ですよ」と男は無雜作に答えた。「僕が何者かということは今言えないが、ことによるとあなたは僕が名前を言えば知っているかも知れません。僕はある書

類を入れた鞆をここへとりに来たのですよ。その鞆は、あなたが先程までいた橋の下にかくしてあるのです。この前に来たとき——もっともこの前と言つても三日ほど前のことですがね——そこへ隠しといたのです。少し秘密の書類がはいっているので、かくし場所にこまりましてね。実に安全な隠し場所ですからね、あそこは。ところが僕らの仲間の中に卑怯極まる裏切者がいることがわかったのです。しかも困ったことにはその男に僕は今朝鞆のありかを話してしまったのです。というのは最近その筋の搜索がきびしくて、東京にいては安全でないので、一まず東京をはなれようと思つて、万事をその男に話して後事を託したのです」

「僕にそんなことを話しても大丈夫なんですか？」と私はこの男

が平気で私に秘密を打ち明けるのを聞いて、びっくり吃驚して言葉をはさんだ。

「あなたは裏切者じゃありませんからね。それに実はこの程度のこととは誰に話したってかまわんです。もう世間にわかっているんですからね。私のことも誰に言っただってかまいませんよ。ただ明朝あす私がここを出るまでは秘密を守っていただけかと困りますがね。ここで大声をたてられたりしたらそれつきりですからね。明日の朝になったら、まっすぐに一番近くの交番へかけつけて話したってかまいません。かえってその方が都合がよいくらいです。どうせ警官と鬼ごっこをしているような身体からだですからね。この近所にまごまごしていつかまるようなことはありませんよ」

「ところでさっきの続きをもう少し話しましょう。僕がその男に秘密書類のありかを話すと、すぐそのあとで一人の同志がやってきて、その男はスパイだった、と知らしてくれたのです。そこで僕は東京を出るのを一日のばして、ここへ鞆をとりにつけてきたのです。その男にさきへ失敬されちやたまりませんからね。僕らの同志何十人何百人もの生命にも関係のある重要書類がその中には、はいつているのですから。ところが、驚きましたよ。その男はもう既にこの動物園の中へやってきているのです。変装をしていました。僕にはすぐにわかりました。僕もこれで変装しているのですよ。僕の年齢は四十位に見えろでしょう。僕は実際は二十四ですよ。髭も何も生えていやしないのです」

「向こうはあなただということに気がついているのですか？」と私はたずねた。

「それはどうかわかりません。たぶん気がついてはいまいと思いますがね。とにかくその男はまだこの動物園の中にいることは確かです。この動物園の入口から左手へ行ったところに、ちようど猿の檻と並んで、鷲や鷹などのはいつている檻があるでしょう。

あの檻のうしろへ、その男がかくれるとこを僕は見届けてあるんです。で真夜中の十二時過ぎになると、奴はきつと出かけてきますよ。僕がすっかり教えといたですからね。そして、先^{さきほど}程あなたがかくれていた橋の下へはいつてゆくにきまっているのです。

実を言うと僕はさっきあなたをその男と間違えてあんな失礼な真

似をしてしまったのです。なあにあのピストルは玩具おもちゃのピストルですよ。今朝銀座の玩具屋で十銭で買ってきたのです」

男はちよつと言葉をきつて薄明かりにすかして腕時計を見た。「もう十二時をまわりましたから、今にやってきましたよ。だまつて見ていましょう」

妙な時刻に妙な場所で知り合いになつた私たちは熊笹の中に身体からだをかくして、息をころして待っていた。丹頂は眠つていて見えてばさりとも音をたてないが、遠くの方からは、いろいろな動物の啼なき声こゑが間断たえまなく聞こえてくる。

四

「とうとうやつてきましたよ」しばらくすると男は私の肩を叩いて、低声こごえで私の耳に私語ささやいた。私には登音あしおとも何も聞こえなかったが、しじゅう死生の巷を往来している彼は耳さとかそれを聞きつけたらしい。

やがて彼はしずかに身を起こして、音のせぬように熊笹の中から這い出した。

「音をさせぬように、そつとついてきなさい」言われるままに、私もあとから這って行った。

「ほら、あそこに黒い人影が立っているでしょう。いま溝の中へ降りるところですよ。ほら降りてゆきました。これから奴は橋の

下へ行つて仕事をはじめののです。もう少しこちらへ出て見ていなさい。そして私が合図をしたら急いでまた熊笹の中へかくれるのですよ」

こう言いながら彼は大胆に立ち上がつて、はだしになつて足速に歩いて行つた。橋の上まで来ると、彼はそこにそつとしゃがんで、五六分間じつとしていた。しばらくすると橋の上へ一尺ほどの黒いものがゆつと現れた。彼は大急ぎでそれを手にとって何かさがしていたが、ものの五秒もたたぬうちに手をあげて、私にあつちへ行けという合図をした。それからすぐに、自分でも飛鳥のような敏捷さをもつて私の方へかけ出してきた。もつとも、それでいて彼の蹠音はほとんど聞こえないくらいだった。

私たちは無言のまま再び熊笹の中へ身を横たえた。そして二十分もの間じつとしていた。やがてしずかな薄暗がりの中に、さくさくと土を踏んで歩く男の蹠音が聞こえたが、それもだんだん遠くへ消えて行つて、あとは時々妙な鳥の啼声がするばかりである。

「実にうまくゆきましたよ」と三十分もの沈黙の後に彼は低声こゝろこゝろで言つた。「もししくじつたら、鞆を奪いとして、あの裏切者が上がつてくるところを、下の石畳の上へ突き落としてやる決心をしていたんですが、そんなことをする必要がなくて助かりました。こんな処では声をたてられるのが一番禁物ですからね」

「鞆はどうしたのです。取り返せましたか？」と私は彼が何もも

ってこなかった様子を見ていたので、不審に思ってたずねた。

「鞆は必要はないのです。中味をぬいてしまえばね。あの鞆の中には我々同志の名簿がはいっていたんで、あれをもって行かれた日には我々は一網打尽に一人のこらず検挙あげられてしまうところだったのです」と言いながら彼は懷から小さい手帳をとり出した。

「これですよ、僕は他の手帳をもつて行って、あの男が鞆を橋の上へあげた間に、そつとすりかえてきたのです。その手帳には、いい加減な名前を書いておいてやりました。中には政府の大官や、有名な実業家や、大学教授の名前なども書きこんでおきましたよ。明日になってあの男が、あの出鱈目でたらめの名簿を手柄顔に警視庁へもつて行ったら、素敵な喜劇が演ぜられるでしょう」

二人はまた沈黙した。一しきり水禽みづとりの檻のあたりでぎやあぎやあ啼声がきこえたが、しばらくするとまたしずまった。もう朝の三時頃であろう。町の物音もすっかり静まった。男は眠っているのか、眼をつむって安らかに呼吸している。私は眠るところではなかった。頭を擡もたげて、薄明かりで時々小首をかたむけながら相手の顔を見ていた。とつぜん私の頭に今までどうしても思い出せなかったある記憶が一度に甦よみがえってきた。

——たしか三日前の新聞だった。社会面に段ぬきでのついていたあの写真がきつとこの男の写真に相違ない。私は全身がぞつと寒くなつて胴慄どうふるいた。全国の警察がいま総がかりで搜索して、いまだに見つからない秘密結社の首魁しゅかいが、こんなところにか

くれていて、しかも、私に向かつて落ちつき払って秘密を打ち開けているのだ。青年は眠っているらしい。そつと懐へ手を入れれば、この男がたつたいま話した手帳が手にはいるわけだ。それをもつて一目散に守衛のもとへかけつけたら……私はつい卑劣極まる考えを起こしたが、すぐにあわててその考えを打ち消した。たといこの男がどんな悪人であろうと、この男は私には親切だった。それに私を信用して何もかも打ち明けて、いま私の前で眠っているのだ。それにこんな親切な人間が悪事をするわけではない。何かの間違いに相違ないと私は考え直した。

「やつぱり愚図々々ぐずしていちや危険だ」と眠っていたとばかり思っていた青年がその時出しぬけに起き上がって言った。「あの野

郎のことだから、この薄暗がりの中できつと鞆の中味を調べてみるに相違ない。明日の朝まで待っていちや危ないから僕はこれで失敬しますよ」

「どうするんです？」私は吃驚^{びっくり}してたずねた。

「外へ出るんです、夜の明けんうちに」

「どこから？ 塀を越して？」

「塀を越すわけにはゆきませんが、逃げ道は外^{ほか}にありますよ。いくら安全だと思っても逃げ道のない袋の中へうつかりはいつてゆけませんからね。どんな間違いが起こるかも知れませんか」

私はこの男の用意周到さに驚いたが、どこから逃げるつもりなのかは見当もつかなんだ。そして、いまこの男に逃げられるのは

薄気味が悪くてたまらないような気がした。

「明日の朝になると危険だというのは、どういう意味なのです？」と私はあわててたずねた。

「手帳がにせ物だとわかればあの男は僕がこの中にいることを知ってきつと夜の明^よけんうちに逃げ出すか、ここの守衛を起こすかして、手配りをするにきまっていますよ」

「では僕も一しよにつれて逃げて下さい。こんなところで見つかっては僕は弱りますから」私は明日の朝警官にひきたてられて動物園を出てゆく自分の姿を想像して額から脂汗がにじみ出た。

「あなたは罪にはなりますまいが、嚴重な取り調べを受けるのはきまっています。僕のせいでそんなことになっちゃお気の毒だか

ら、では一緒にお出でなさい。少し窮屈ですよ」

私は不思議な青年のあとについて熊笹の中を出た。そして宵のうちに私がいっていた水路の中へ橋の少し下手のところから降りて行つた。

五

ちようどその時に入口の方で物音がきこえてきた。そして物音は刻々に大きくなつてきた。

「やっぱり予想どおりだ。もう警官の手がまわりましたよ」

こう言いながら青年は足速に水路を下手の方へ下つて行つた。

私も恐ろしさに身も世もあらぬ気持ちであとをついて行つた。水路はところどころトンネル隧道になつていたが中腰になればくぐり抜けることができた。物音はだんだん高くなつて人の話声やはいけん佩剣のがちやがちやいう音が手にとるように聞こえてきた。たしかに警官の一行らしい。

「じつとしていなさい。通りすごしてしまひましょう」

ちようど二つ目のトンネル隧道へはいつた時に青年はこう言つてじつと息を殺していた。私も石のようになつて立ち停どまつた。

二人の頭の上を搜索隊の一行ががやがや話しながら通りすぎた。「たしかにどつかに隠れているにちがいありません。僕が警察と関係のあることを知つて、あわててここへやつてきたにちがいな

いす。鞆を橋の上へあげた拍子にすりかえられたんですから」

この青年が裏切者と言つていた男が、一行の案内をしているらしい。そのうちに話声もあしおと蹠音もだんだん遠くなった。不意の来客に驚いた動物が眼をさまして、羽ばたきをしたり、啼き声を上げたりしている。私たち二人はだまつてまた歩き出した。

二三町も歩いたと思う頃、私たちは比較的長いトンネル隧道へはいった。中はまつ暗だった。

「もう大丈夫です。警官ともあろうものがこの放水路に気がつかんなんていい気なもんですよ。あんなことでは気のきいた犯人はつかまりませんよ。犯人の方じや一段二段三段と計画してやっているのに、警官のやることは行きあたりばったりで無方針ですか

らね。何しろ月給でやってる仕事だから、穴だらけです。彼らはまず東京の地理を勉強する必要がありますよ……だがさつきはちよつとひやりとしましたね。僕はあの時あなたが気がかわつて声をたてたらどうしようと思いましたよ」

私は返事もせずに、口をゆがめて無理に苦笑くしょうした。恐ろしくて話をするどころではなかったのだ。

やがて隧道トンネルの口が見えた。そこはかなり水かさのある河だつ

たが、二人は堤防の石垣に手をかけて無事に地上へはい上がった。東の空は白んでいた。黎明のさわやかな風が疲れきつた身体からだに快くあたってくる。しかし二人は愚図々々しているわけにはゆかなかった。

ちようど誂え向きに空からぐるま車の札をかけてやってきたタクシーを呼びとめて、青年はそれにとび乗った。「あなたもそこいらまで一緒に行きなさい」と言われるままに私も彼と並んで腰をかけた。運転手はちよつと不審そうに私の顔を見て行き先もきかずに走り出した。

「大成功、大成功、今頃動物園の中じや大騒ぎだよ、名簿はたしかに取り返してきた。きわどい所だったがうまく行つたよ。あの裏切者は今頃は面目まるつぶれだよ。おまけに善良なる市民の話相手があつて、昨夜は退屈ゆうべせずにすんだよ。須田町のあたりでこの客人をおろしてやつてくれたまえ」しばらくしてから彼は運転手に向かつてこんなことをあたりかまわず大声で話して笑つた。

話は風が吹き飛ばしてしまうから人に聞かれる心配はないのだ。

警視庁の許可証をもって、正規の営業をやっているこの運転手も明らかに同志の一人らしい。

「これから日本橋へ出て丸の内を抜けよう。そして朝のうちに僕は東京をたつことにする。本部にはまだ手がいらないんだね？書類はみんな焼いてしまったろ？」青年は快活に語りつづけている。

私が須田町でタクシーを降りたときはもう夜はすっかり明けはなれていた。降りがけに青年は元気よく「さよなら、お互いに名前はきかんことにしましょう、あなたの袂たもとにあるものは、ちっとも不正なものじゃありません。僕の小遣いですよ」と言った。

私は日本全国を震駭しんがいさせつつある重大事件の巨魁きょかいが帝都の中央を悠然ゆうぜんとタクシーで疾駆しつくしてゆく後影を見送りながら、何とも名状しがたい気持ちを抱いて、ぼんやりその場に立ちつくしていた。袂へ手を入れてみると小さいなめらかな紙片かみきれが指さきにふれた。取り出してみると、この二三ヶ月見たこともない十円紙幣が二枚あった。

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選」
「#」「1」はローマ数字、1-13-2
「1」〔論創ミステリ叢書1〕 論創社

2003（平成15）年10月10日初版第1刷発行

初出：「新青年 九卷一二号」

1928（昭和3）年10月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年7月4日作成

2011年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

動物園の一夜

平林初之輔

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>